狂いじぃ！？～最狂のおじいちゃんは孫に恋をする～

桐龍朱音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狂いじぃ！？～最狂のおじいちゃんは孫に恋をする～

【Ｎコード】
Ｎ１４８０Ｉ

【作者名】
桐龍朱音

【あらすじ】
容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群、おまけに大企業の若き青年社長である神崎薫。性格がやや難な所を除けば完璧な彼にはなんと孫がいる。しかも彼はその孫に恋をしてて…？＊＊＊＊思いつきから生まれた普通じゃちょっと有り得ないラブコメです！！＊＊＊＊＊

今日も『アイツ』がやって来る

青く澄み渡った空に浮かぶ真っ白な雲。
少し熱を帯びて吹く穏やかな風。
夏本番になる前の、爽やかな午後である今日この頃。
その爽やかさをぶち壊すような暑苦しい『アイツ』の声が扉の向こうから聞こえてきた。

「紫苑ちゃーん！！」

ドンドン、と扉を叩きながら聞こえてくる低くも甘い声。
誰もが「聞いただけで腰が砕けそうになる！」なんて言うほどの美声だ。
けど、私にはこの美声に対する免疫というものが備わっている。
物心がついたときから聞かされていれば誰だって耐性というものはつくのだ。
だからいくら美声だからって、その声に唆されて扉を開けてなんてやらない。

「しーおんちゃあーん！！いないのぉー？」

段々と口調が子供っぽくなっていく『アイツ』。
そろそろ痺れを切らして何かやらかすかもしれない。
一応、あたしの部屋の扉は超合金製の頑丈なものに錠前型の鍵を五つ付け、さらにその錠前達に鎖を何重にも巻いて補強したというス

ペシャルな扉だ。
おまけにその扉の前にはタンスやら椅子やら机やらのありとあらゆる部屋の中の家具を置いておいた。
自分が外に出る時に大変だとは思ったけど、『アイツ』から身を守るためには仕方ないことだ。

まさかいくら『アイツ』でもこのスペシャルな扉を壊すなんてことはできないと思うが…念のために扉と反対側にある窓に移動する。
そこには緊急脱出用として窓枠にしっかりと固定したロープを下まで垂れ下げておいた。
できれば使いたくないんだけど…。

「…チッ、この扉邪魔だな。紫苑ちゃんに会えねぇじゃねぇか」

舌打ちとともに繰り出された冷たい美声。
本来『アイツ』が人と接する時に使う声。
つまり、この声が『アイツ』の本当の声というわけだ。
さっきまで使っていた妙に子供っぽい口調と甘々な声はあたしを含めたごく少数の身内だけにしか使わない。

———こりゃヤバイかも…

『アイツ』の声が変わったということは本気になったということだ。
つまり…どんな手段を使っても自分の思い通りにさせる、という『アイツ』の本性が出てきたのだ。

「おりゃっ！！」

軽快な掛け声とともに炸裂する轟音と地震のような振動。
思わず頭を抱えて蹲る。
しばらく轟音と震動は余韻を残すようにして、部屋中を揺らしていた。

「しおんちゃあーん！！！！！！！！！！！！！！」

さっきよりも鮮明に聞こえる『アイツ』の声に、弾かれるようにして立ち上がった途端、猪もビックリの勢いで走ってきた『アイツ』に勢いよく抱きしめられた。
ロープを掴む暇すらもなく、ほんのりとシトラスの香りをさせた『アイツ』に捕まってしまったのだ。

「ぐえっ！！！」

「ああっ！！！紫苑ちゃん！！！会いたかったよおー！！！！！」

「はっ…はな…して…」

「夜の間中ずっと寂しかったんだよう！！どうして俺と一緒に寝てくれないの！！！！！」

「くっ…くる…し…い…」

「３６５日２４時間、俺は紫苑ちゃんと離れたくないのにー！！！！」

「…だ、か…らっ…苦しいんだってば！！！！！！！！」

「おっ！？」

勢いよく突き飛ばした…はずだったのだが、『アイツ』は軽くよろけただけだった。
けど、そのおかげで『アイツ』とあたしの間に僅かに隙間ができたので、何とか楽に呼吸ができるようになった。
…まだ、抱き締められたままって言うのが気に食わないけど。

「やっと紫苑ちゃんの可愛いお顔が見れたー！」

にっこりと満面の笑みを浮かべてあたしを見つめる『アイツ』。
嫌みなくらい綺麗な顔立ちをした美青年。
「見る人誰もを虜にする」と言われるその容姿が今は憎らしい。

「何が『やっと紫苑ちゃんの可愛いお顔が見れたー！』だよっ！！あんなに勢いよく抱きしめられたら息できねーだろうがっ！！！！ちょっとは考えろこのバカが！！！」

「紫苑ちゃん、言葉遣いが悪いよお？女の子なんだからもっときちんとした…」

「ざっけんなよ！！誰のせいでこんな言葉遣いになってると思ってんだ！！」

「えっ、俺のせい？」

「１００％そうに決まってんだろうがあ！！」

「そんな…俺のせいだなんて…」

おいおい、ちょっと待て！！
何でそこで顔を赤らめる！？

「…何で赤くなってるのよ？頭おかしいんじゃないの？」

「いや、だって俺のせいってことは…紫苑ちゃんが『俺色』に染まってきてるってことで…」

「ぎゃあああああっ！！！キモイこと言うんじゃねぇー！！！」

何だよ『俺色』って！！！
染まりたかないっつーのそんなキモい色！！！

「キモいだなんてひどいぞ！！いろんな意味で食べちゃいたいくらい紫苑ちゃんのこと愛してるのにー！！！」

「ちょっと何言ってんの！？サラッと問題発言してんじゃねーよ！

！てか、いい加減放せー！！！」

そろそろ叫びすぎて喉が痛くなってきた。
それに何とかこのキモいヘンタイから逃れるべく、さっきからもがき続けているせいで無駄に体力を消耗してしまった。
…てか、どうしてこんなに暴れてるのにこの腕から逃れられないんだ？

「もう、素直じゃないんだからー。そんな子にはお仕置きだゾ☆」

「はあ！？」

言った途端、顎を掴まれ思いっきり顔を上に上げられる。
ひょろりと背が高い『アイツ』の綺麗な顔があたしを見下ろす。
そしてその顔がゆっくりと近づいてきて――――…って、ええ！？

「なっ、何するつもり！？」

「何って…お仕置きのちゅー☆」

「ちゅー！？」

ちゅー、ってあれですよね？
キスってやつですよね？
つまり、このキモいヘンタイはあたしにキスしようとしてるのか！？

「ちょっ、ちょっ、ちょっと待てっ！！！！キスなんてできるわけないだろ！！！あんたはあたしの――――」

「お戯れが過ぎますよ、社長」

不意に、真横から冷静な声が聞こえてきた。
『アイツ』に顎をしっかりつかまれているせいでその人物を見ることはできないが、この声はあの人に違いない。

「何だよー今いいところなんだよ。邪魔すんな、湊（みなと）」

「そういうわけにはまいりませんわ」

「…チッ、しゃーねーな」

ようやく私の顎から『アイツ』の手が外れる。
まあ、その前に憂いを含んだ顔で名残惜しそうにあたしの顔を見たけど。
まるであたしに「離さないで」と言ってほしいような顔だった。

あたし以外の人だったらその表情にクラっとしてしまうかもしれない。
何てたって『アイツ』の顔は「見る人誰をも虜にする」と言われるほど綺麗な顔だ。
けど、物心ついた時からこの顔を見続けているあたしには効果がない。
声と同様、免疫がついているのだ。

だから軽く無視できる。

「湊さん、ありがとうございます。本当に本当に本当に助かりました！！！！」

「いえいえ。紫苑様が無事でよかったです」

「湊さん…！」

あたしは思いっきり湊さんに抱きついた。
後ろで「ああっ！」とか言ってる『アイツ』の声が聞こえたけど無視。

「社長。今のは過ぎた行為ですよ」

「だってさー、紫苑ちゃんが俺の愛をキモいなんて言うんだもん」

「確かにキモいです、社長」

「ひどっ！！！お前までそんなこと言うのかよー」

「紫苑ちゃんを愛することは大切です。けれど愛の意味を履き違えてしまっては困ります。社長の紫苑ちゃんに対する今の行為は完全に恋人に対するものです。それではダメでしょう？」

「えー」

不満そうに顔を歪める『アイツ』。
何でここでそんな顔をするのか分からない。
恋人に対する愛をあたしに向けてはいけないなんて、そんなこと当たり前のことなのに。
だって、あたし達は――――…

「紫苑様は社長のお孫さんなんですよ？」

「そうよ、おじいちゃん」

祖父と孫。
それがあたし達の関係。

つまり、『アイツ』はあたしのおじいちゃんなのだ。

今日も『アイツ』がやって来る（後書き）

この度は『狂いじぃ！？』を見て下さってありがとうございます。
はじめまして、作者の桐龍朱音です！

私が投稿している他の話が暗めのものが多かったので、無性にコメディー調のものが書きたくなり、生まれたのがこの作品です。
あり得ない設定が多くなるかもしれませんが、『狂いじぃ！？』（クレイジイ）のタイトル通り、常人じゃない人物の恋を描いた物語なので温かく見守って下さると嬉しいです。

これからも『狂いじぃ！？』をよろしくお願いします！

ヘンタイＷｏｒｌｄ！？

『アイツ』ことあたしの『おじいちゃん』の名前は『神崎薫』。
女みたいな名前だけど３２歳のれっきとした男だ。
身内が言うのもなんだけど、男にしては無駄に綺麗な顔をしていて、体型もモデル並みにバランスがとれていて、声だって妙に色っぽくて…まあ、要するに（内面を除いては）最高級の美形だったりする。

『おじいちゃん』は２０代の頃に今は亡きあたしのおばあちゃんの再婚相手として神崎家へとやって来た。
その頃のあたしは小学校低学年くらい。
ぶっちゃけ『おじいちゃん』との初対面が何歳の時だったかよく覚えていないけど、やたらと顔の良い若い男を「今日からこの人が紫苑ちゃんの新しいおじいちゃんよ☆」なんて言って紹介してきたおばあちゃんに対して開いた口がふさがらなかったことだけは覚えている。

ちなみにあたしの本当のおじいちゃんはあたしが生まれてすぐに病気で亡くなってしまっていた。
それから、数年前にお母さんとお父さんも不慮の事故で亡くなってしまったので、現在では家族と呼べるのは『おじいちゃん』しかいない。

その『おじいちゃん』は今、日本屈指の貿易会社【ＫＡＮＮＺＡＫＩ】の社長をしている。

元々はあたしの本当のおじいちゃんが起した会社で、その亡き後はおばあちゃんが引き継いでいたのだけど、『おじいちゃん』が我が神崎家にやって来た時その経営権をすべて譲ったので、おばあちゃんが亡くなる少し前からずっと『おじいちゃん』が社長としてこの【ＫＡＮＮＺＡＫＩ】を経営している。

会社での『おじいちゃん』は裏で社員たちから「氷の帝王」と呼ばれているらしい。（↑湊さん情報）
どうやら、おじいちゃんは親しい人以外の前では絵に描いたような冷酷非道な人間になるようだ。
いつだったか昔、おじいちゃんの会社にこっそり遊びに行ってみた時に垣間見たおじいちゃんの姿が家で見せる姿と違いすぎて思わず「誰やねん！？」と何故か大阪弁で叫んでしまったことがあった。
ちなみにこの時は叫んですぐに逃げたのでどうにかおじいちゃんには見つからずに事なきを得たんだけどね。

会社で見せる冷酷非道な姿と親しい人の前で見せるうぜえくらい子供っぽくてヘタレな姿、どちらがおじいちゃんの本性なのか測りかねるけれど、あたしは密かに冷酷非道な方が本性であってほしいと思っている。

何故かって？
それはあんな綺麗な顔をしていておまけに仕事もよくできる「大人」なのに、ヘタレで子供っぽいのが本性だなんて信じたくないから。
信じてしまったら最後、なんか色々「大人」に対するあたしのイメージがすべて打ち砕かれてしまいそうだから、あたしは絶対に信じない。

まあ、「冷酷非道」なんて性格も人としてどうかとは思うけどね…。
愛情表現が行き過ぎてるところはあるけど、それでも血の繋がってないあたしをちゃんと家族として愛してくれていることはわかってる。
あたしだって『おじいちゃん』のことは大好きだ。
元来の口の悪さも手伝っていつもひどいこと言ってばかりだけど、それでもあたしの家族はもう『おじいちゃん』だけだから、大切に思っている。

———だけどね、こうやって目の前でヘタレて駄々をこねられると、色々と先が不安なんですよ…。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「しおんちゃーんっ！湊にばっかり抱きついてないで俺にも抱きついてよう！！」
「あんたがヘンタイじゃなくなったら抱きついてやるよっ！」
「そりゃ無理だっ！！！」
「無理なのかよっ！？」
今にも突進してきそうなおじいちゃんから身を守るべく、あたしは

急いで湊さんの背後に隠れた。
湊さん相手ならおじいちゃんもそう簡単には手出しできない。
だって湊さんもおじいちゃんと同じくらい（色んな意味で）強いからだ。

「食べちゃいたいくらい愛してる紫苑ちゃんを目の前にして、俺はヘンタイにならずして何になればいいと言うんだい紫苑ちゃん！？」
「普通のおじいちゃんになれっつーんだよっ！！このバカがっ！！」
「いやいや、こんなに可愛い紫苑ちゃんに対してヘンタイにならなかったら俺は男じゃない！！」
「何言ってんのー！？」
「いや、待てよ。それじゃあ、世の中の男（ヤロー）ども全員が紫苑ちゃんに対してヘンタイに…それは許せねえっ！！」
「…ちょっと」
「紫苑ちゃんは俺だけのもんじゃいっ！！！！」
「…ちょっと、そこのヘンタイさん？あたしの声聞こえてます？」
「こうなったら紫苑ちゃんに近づく男（ヤロー）どもを片っ端からぶっ殺していくしか…」
「…」

どうやら目の前のヘンタイさんは一人「Ｍｙ　Ｗｏｒｌｄ」（通称・ヘンタイＷｏｒｌｄ）へ旅立ってしまったようです。
会話が成立いたしません。

「…湊さん、あのヘンタイどうしたらいいんでしょう？」

どうしようもなくなったあたしは湊さんに助けを求めた。
すると湊さんは「お任せください」と言って、ヘンタイのもとへと歩いて行った。
そして今だ　Ｍｙ　Ｗｏｒｌｄ　に浸りきっている変体の耳元に何やら囁いた。

「それだけはダメだよ紫苑ちゃんっ！！！」

湊さんに何やら耳元で囁かれたおじいちゃんは、電光石火の勢いであたしに走り寄ってきた。
突然のことで何の反応もできなかったあたしは、気がつけばおじいちゃんの腕の中にガッチリと抱き締められていた。

「うっ！？」

「それだけはダメだよー！！！絶対にダメだようっ紫苑ちゃん！！！！」

「…ち、ちょっ…くる…しい…」

「ダメだったらダメだあーっ！！！」

「は…な…して…く、くる…し…」

ひょろりとした外見からは想像もできないほど逞しい胸板に顔を押し付けられて、上手く呼吸ができない。
何とか体をずらして呼吸をしようと頑張ってみても、シトラスの香りと細いくせにしっかりとしている腕に抱きしめられて、身動き一つできやしない。

「ん…うぅ…し…ん、じゃ…う…」

「ダメだーしおんちゃーんっ！！！」

『ダメだー』はこっちのセリフだよ！！！
呼吸が上手くできなくてちょっとクラクラしてきちゃったじゃないの！！！
もしかしてあたし、このまま息が吸えなくて死んじゃったりするの！？
死亡原因が「おじいちゃんに抱き締められて呼吸困難」なんて笑えない！！
もしマジでこのまま死んだらぜってえこのヘンタイを呪ってやる…！

「失礼します」

冷静な湊さんの声がしたと思ったら、ベリッ！ドガンッ！という音とともに新鮮な空気が辺りに満ち溢れた。
あたしは無我夢中でその空気を何度も吸い込んでは吐き出して、呼吸を繰り返した。
ああ、呼吸ができるって素晴らしいことだねっ！！

「…何してんの、おじいちゃん？」

何度目かの呼吸を終えて、ようやく息が整ったところでふと目線を横にずらすと、数メートル離れたところにおじいちゃんらしき物体が転がっていた。
「だめだよう紫苑ちゃーん」とか言いながらすすり泣いている。
…てか、まだ言ってんのかよその言葉。
何がダメなのか意味がわからん。

「…湊さん、おじいちゃんに何て言ったんですか？」

冷めた目でおじいちゃんを見ていた湊さんに、そっと尋ねてみる。
思い返せばこの一連の騒動は湊さんの謎の囁きから始まったのだ。

「『紫苑さまがどこぞの馬の骨とも知らぬ男と駆け落ちをすると言っております』と申し上げたんですけど、少々刺激が強い言葉だったようですね…。まさかここまでウザく…いえ、取り乱すとは思い

ませんでした」

「それで、『ダメだよー』って繰り返してんですかあのヘンタイは」

「はい。あろうことか紫苑さまを窒息死させそうな勢いで抱きついていたので、引き離して投げ飛ばしておきました」

「…投げ飛ばしちゃったんですか」

「はい」

にっこりと艶やかにほほ笑む湊さん。
見た目は大和撫子といった感じのものすごい美人さんなのに、大の男を（しかも上司を）投げ飛ばしちゃうほど強いのです。
…おじいちゃんといい、湊さんといい、人は見た目で判断しちゃいけないネ。

「うえーん、しおんちゃーん」

…まだ泣いてるよあのヘンタイ。
しかも「うえーん」とか言いながら泣いてるんですけど。
あの人32歳の大人の男ですよね？
しかもあたしのおじいちゃんですよね？
泣き方3歳児レベルなんですけど。

「社長、いい加減にしてください。まだ仕事も残ってるんですから、

社に戻りますよ」

そう、日曜日だとはいえ社長であるおじいちゃんに休みはない。
今だって仕事中のはずなのだ。
にも関わらずここにいるということは、このヘンタイは目下職務放棄中というわけだ。
…ほんと、この人が社長でうちの会社は大丈夫なのだろうか？

「しおんちゃーん」

「…」

重い溜息をひとつ吐くと、湊さんはあたしの方を向き、「失礼しますね」と一言挨拶をすると、おじいちゃんのスーツの襟首を引っ掴み、ズルズルと引きずりながらあたしの部屋を後にした。

「湊離せっ！！俺は紫苑ちゃんの傍に…」

「それ以上駄々をこねたら顔面破壊しますよ？」

「…」

あたしの部屋から出てすぐの廊下から、そんなやり取りが聞こえてきた。

ヘンタイＷｏｒｌｄ！？（後書き）

パソコンの調子が悪くて投稿が遅れてしまいました。
読んで下さっている方々がいらっしゃったら申し訳ないです（ーー；）

今回はちょっと『おじいちゃん』の情報を入れてみましたが、どのキャラも容姿とかその他色々まだ謎のままですね。
次回ぐらいにはちゃんと書けるといいなあ、とか思ってます。

ちなみに、大体のキャラ設定はこんな感じです←

薫…容姿・頭脳・運動神経すべてにおいてパーフェクトな奴。紫苑に関しては愛ゆえに狂っちゃうときもあるけど、意外と常識は持っていて血が繋がってないとはいえ孫である紫苑に抱く恋心に悩んでたりもする。複雑な過去アリ。

紫苑…自覚無しの明るい美少女。言葉づかいが少々悪い。頭はいいくせにかなりの鈍感娘。普段は表に出さないが両親の事故死にかなりの心の傷を負っている。

湊…大和撫子風美人のくせに、ものすごく強い。何気に毒舌。薫の優秀な秘書であり、良き理解者。紫苑を妹のように可愛がる。実は薫のことが好き…？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1480i/

狂いじぃ！？～最狂のおじいちゃんは孫に恋をする～

2010年10月15日21時23分発行